

外国語活動における必然性のあるコミュニケーションを伴う単元構成 ～意図的インプットと明確なアウトプットの場の設定による児童への影響～

中岡 正年

子どもたちにとって日常的に話す言語とは異なる外国語（英語）を学習者（小学校4年生）がいかにすれば話したくなるかを考え本研究に取り組んだ。これまでの実践から実際に子どもたちが外国の方に自分たちの考えや思いを伝える場（アウトプットすることが可能な場）を設けることで積極的に活動する姿が見られ、外国語の表現に慣れ親しむのに有効的だと考えた。そこで、本実践においては他教科との関連を図り、自分たちが学習したことや思いを他者に伝える場面を意識させインプットする場を、単元の終末にはアウトプットする場の設定を行った。仮説の検証として、子どもたちの活動観察や実践後の聞き取り調査などを行った。その結果、学習者が積極的に学習したことを振り返り、外国語の習得具合を確認している姿が観察できた。また多くの子どもたちが今後も外国語をさらに習得したい思いをもっている結果が得られた。

キーワード：外国語活動、情報端末、省察性、自己分析、カリキュラム・デザイン

1. 研究の目的

本実践の子どもたち（小学校4年生）は、昨年度からの外国語活動において継続して簡単な英語の歌を歌ったり、ゲームを行ってきたりしたことで英語での表現に慣れてきている状態にある。また英語圏以外のゲストティーチャーとの交流をとおして、他国の文化にも興味をもつ子どもも増えてきている。一方で、実際に訪日外国人にウェルカムカードを渡す実践も行っている。その際、緊張してしまったり、上手く自分の考えや思いを伝えられなかったりしたことで、悔しい思いをしている子どももいた。しかし、その実践から多くの子どもが英語を話したい、外国の方とコミュニケーションをとりたいという思いがより高まっていた（図1）。

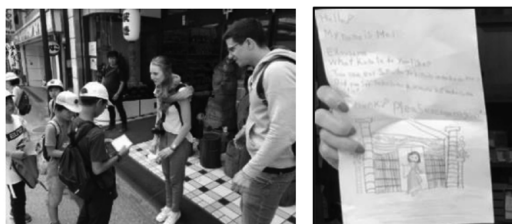


図1 ウェルカムカードを渡す場面とウェルカムカード

そこで、単元の終末に、既習事項や自分の思いを訪日外国人の方に伝える場を設定し、学習者がそのことを意識しつつ、外国語での表現をインプットする場を設けた。そうすることで、コミュニケーションに必要な言葉を既習事項から考え、新しい表現を積極的に習得し、主体的に学習に取り組むと考えた。その仮説を検証するために、単元を構想し実践中とその後において、子どもたちの活動観察や聞き取り調査などを行った。

また、単元の終末場面には外国語を活用する意義や必要性を子どもたちが感じられるように関西国際空港

にて自分たちの学習した内容をもとに和歌山の魅力を伝える場面を設けた。そのことは、コミュニケーションをとる相手が明確であれば学習者がより英語を話したいという意識をもつと期待したためである。

単元構成として、単元の終末に実際にアウトプットの場を設けることは多くの実践において行われている。

しかしながら、その多くは、普段行われている教室等にゲストティーチャーという形で来ていただいた方に、自分たちの既習の内容を伝えることが多いと想定される。また、その際には日本語が堪能な方が対応することも多く、子どもたちが必然性や緊迫感をもって英語でコミュニケーションをとっているとはいえないだろう。

そこで、本実践においては自然な形で多くの外国の方が利用している関西国際空港に足を運び、訪日外国人の方に自分たちから話しかけ、和歌山の魅力を伝えるという単元の設定を行った。こうすることで、外国語を活用すること、コミュニケーションを図ることに必然性が生まれると考えた。また、他教科や他領域と連携することで、自分たちの学習したことが伝えたい情報として子どもたちの中で醸成され、活動に積極的に参加することも考えた。さらにカリキュラム・デザインの視点で多くの教科・領域と関連をもたせて学習を行うことは、学習内容の強化も同時に図ることにもなる。

本実践を核として外国語活動全体と、主に総合的な学習の時間（本校ではCHANGEと名称をつけている）の「ウェルカムカードをわたそう」、社会科の「わたしたちの県の様子」、国語科の「自分の考えを伝える」と関連させた。自分の思いや調べたものを伝えることを軸とすることで、情報の収集、表現の模索を検討し続けると想定した（図2）。

【各教科・領域において習得した知識(内容知・方法知・体験知)の活用・発揮が促され、互いの探究のプロセスが充実していくイメージ】

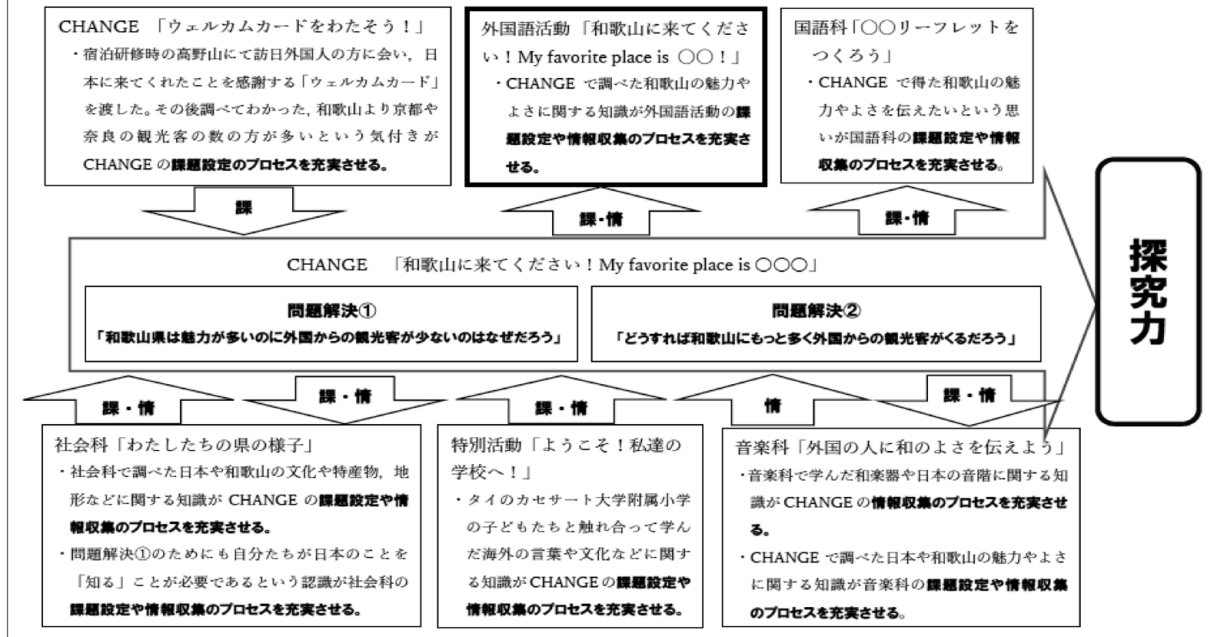


図2 カリキュラム・デザインの表

また、英語の表現として、自分の好きな場所を伝える際には、既習の「I like～」 「Because～」等の表現を活用することが考えられた。実際に伝える相手を明確に意識させ、自分の思いを伝えるために、必要なことを考える中で、子どもたちが課題解決に向けて探究する姿に繋げることを期待した。なお、本校は2018年度の研究主題を「未来に生きて働く資質・能力の育成」と設定しており、身に付けさせたい資質・能力を「探究力」と「省察性」の2つと捉えている。外国語活動においては、「探究力」と「省察性」を次のように定義した。

<p>「省察性」</p> <p>習得した知識を自分の生活や文化と関連付けてより深く理解し、情報を精査し、身に付けた思考力を発揮させ課題に対して解決策を考える資質・能力</p>
<p>「探究力」</p> <p>外国語やその背景にある文化、社会、世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う相手・目的・場面・状況等に応じて、情報を整理しながら考えを形成し、再構築する資質・能力</p>

2. 研究仮説と検証方法

以上のことを踏まえ、研究仮説を次のように立てた。

外国語活動において、単元の終末の活動に既習の内容を外国語で伝える必然性と意図的に伝えたい情報をインプットし、醸成させることにより、子どもたちの中で、既習の内容が教科間において連携、強化され、外国語では、自分の伝えたい思いはどのような表現をするのだろうかと思ひ、外国語での話し方を探究するようになる。

さらに、子どもたちが楽しみながら、自身の成長を感じられるように、タブレット端末の録画機能を活用したり、学習の内容をファイリングしたりすることで、客観的に学習進度などを確認できるようし、日々の活動を記録させた。これらの手立てをもって仮説を検証するために子どもたちの活動分析やアンケート調査、学習者へインタビューなど行い考察を行うことにした。

3. 研究の方法

自分の思いを伝える場を具体的に設定することで、伝えたい思いを外国語で話すための必然性をもたせることになる。一方で、それを行うには外国語での表現をインプットすることが必要になる。そこでインプットをする際には、伝えるために必要な表現を既習事項から考えさせるために次の点を子どもたちに意識させた。

好きな場所や理由の相違をクイズ形式で互いに尋ねたり答えたりし、積極的なコミュニケーションを行うようにすること

また、社会科の学習を想起させつつ、お気に入りの場所を尋ねたり、答えたりする活動も行った(図3)。



図3 お気に入りの場所

さらに、実際にコミュニケーションを図る場を設定し、自分たちの思いを伝えるための手立てとなるように和歌山県の魅力をまとめたパンフレットを作成し、それをもとにコミュニケーションを図るようにした(図4)。

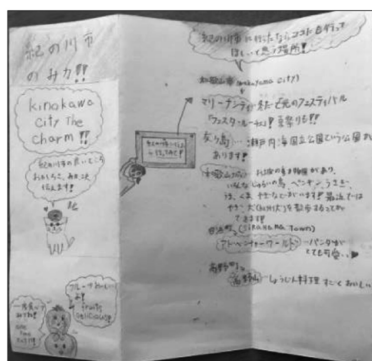


図4 社会科の学習の提示と子どもが作成したパンフレット

このように常時、他教科との連携を図り、既習のことを想起させ、コミュニケーションを図る場面を継続して意識させた。そのことにより、子どもたちにとってインプットとアウトプットが連携した意味のある活動になると考えた。さらに、子どもたちがもっと外国語を話したいと感じるために必要な活動になると考え次のように単元を構成した。

単元計画 (全7時間)

- | | |
|-----|---|
| 第1時 | 外国語で自分のお気に入りの場所の伝え方を考え、表現を知る。 |
| 第2時 | 主教材を活用し、学校の中で好きな場所を伝える表現を知ったり、FLTに相談したりする。 |
| 第3時 | 和歌山の中での自分のお気に入りの場所を考え、外国語で伝える表現について知る。 |
| 第4時 | 主教材を活用し、和歌山の好きな場所を伝える表現を知ったり、FLTに相談したりする。 |
| 第5時 | 実際にインタビューをする場面を想定して、友達とお気に入りの場所についての3ヒントクイズを行う。 |
| 第6時 | 外国の方に、自分のお気に入りの場所を伝える表現を知ったり、FLTに相談したりする。 |
| 第7時 | 外国の方に、自分のお気に入りの場所を伝える。 |

一方で、教室のような、普段の環境の中でインプットの活動を行うのは次のような利点があると考えられる。外国の方に外国語で何かを尋ねたり答えたりすることは普段の生活の中で機会がなく、多くの者にとって不安や緊張を感じることになる。しかし、普段、活動をともししている友だち同士であれば心理的なプレッシャーは軽減される。よって、教室は外国語の表現に慣れ親しむために適した環境だと捉えている。

また、子どもたちが楽しみながらインプットができるように、和歌山のお気に入りの場所についてクイズを出し合う活動を行った。こうすることで、相手と積極的にコミュニケーションを取ろうとする思いが高まり、外国語でのやりとりを繰り返す中で言葉は互いの理解を深めるためのものであることに気付くとも考えた。その結果、探究と省察が生じ、さらに言葉や表現

を獲得しようとする思いをもち、子どもたちが今後も外国語ではどのように表現するのだろうと思考を継続することを期待した。

4. 研究の実際と考察

第5時において、社会科での学びと自分自身が伝えたい思いを意識させるために「Wakayama city」や「Kimino town」など地名を外国語で話させた。このことによって外国語活動と社会科との学習が相互に強化されることを期待したが、本時の大きな活動である「3ヒントクイズ」にて、次のような注意点が必要であったことが明確になった。まず、問題文に地名が入るのであれば、3番目に必ず言うことを徹底させるべきであったことである。例として「粉河寺」のように「Kokawa temple」であるならば、回答者に即座に「粉河」と連想されてしまうので1問目で回答者に地名が推測されてしまう。質問者にクイズでの出題の順番や意図をより意識させる必要があった。

また、ホワイトボードに示した情報を改めて、考察した際に、文字情報が多かったことも課題であることが考えられた。外国語の表現に慣れ親しむ意図もあるのだが、学習者の理解をより難解にしてしまった可能性がある。さらに、メインのスライドとターゲットセンテンスやタイトルにも差異があり子どもたちの思考がまとまらなくなってしまった可能性もあったことは大いに改善を必要を感じている(図5)。

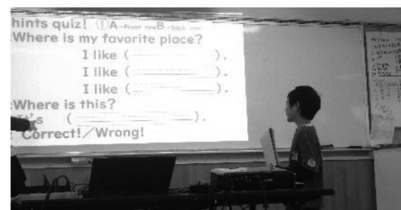


図5 第5時の授業場面

一方、探究と省察性を高めるための振り返りの時間において、子どもたちから次のような意見がみられた。

- T Good. では、最後にもう一問してみよう。
 T Where is my favorite place?
 I like mikans.
 I like Kue.
 I like Shirasaki coast.
 Where is this?
 C Tanabe city.
 C Aridagawa town.
 T No. It's Yura town.
 C あー。
 T これで外国人の人とお話しできますか?
 なんて言ったらいいと思う?
 C よろしくお願ひしますとか、あいさつとか、お礼とか・・・
 T いいですね。
 もう少しもっといろんな言い方を学んだら、和歌山の良さをもっと伝えられると思います。
 それでは振り返りを書いてください。

この振り返りのやり取りをとおして、子どもたちは単元の中での外国語での表現を十分に理解していると判断できる。その上で、子どもたちは、実際の場面では自分たちの学習した内容を伝えて、コミュニケーション

ョンを図るには、挨拶やお礼を行うことが必要であるとしている。これは、他者を意識しているからこそその発言だと考えられる。

そこで、第7時に関西国際空港にて自分のお気に入りの場所を外国の方に伝える実践を行った。

子どもたちは、グループで協力しながら外国の方に話しかけ、自分のお気に入りの場所を伝える活動を行った。限られた時間と場所での実践であったが、どのグループも複数の外国の方に話しかけ自分のお気に入りの場所を伝えることができた(図6)。



図6 関西国際空港での活動場面

5. 成果と課題

授業後の感想やアンケート調査によって、本実践をとおして、子どもたちの多くは、本実践に肯定的な意見をもっていることがわかった(図7)。

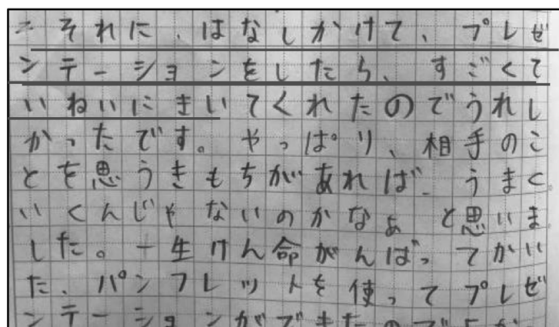
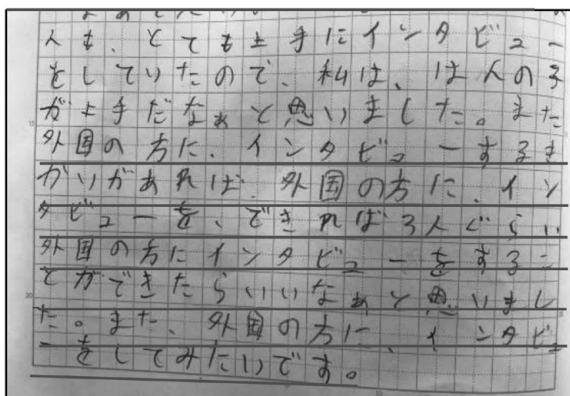


図7 子どもの記述

本実践に協力、参加してくださった和歌山大学、尾上准教授からも次のようなコメントを頂いている。

「私がフォローしたグループも最初は緊張していましたが慣れてくると積極的にお話をしに行っていて、相手の方が和歌山の地名と位置が不案内だと感じると、さつと地図を見せて説明をしていました。大したものだと思います。

ます。もちろん課題も見えてきましたが、今回の活動は子どもたちにとっても自信につながる経験だったのではないかと思います。」

低学年や中学年では初めて外国語に触れる子どももいるため、まずは外国語の表現に慣れることが重要であることは普段の授業からも実感している。そして、外国の方とコミュニケーションをとるためには、ある程度の単語や表現のインプットは必要不可欠であるとも考えている。また、子どもたちへの調査を行い次のことが明らかになったと考えている。英語の単語や表現をインプットする際もコミュニケーションをとる相手を明確に意識していくことは、学習者である子どもたちの言葉の習得や意識の向上に有効的に働いたということである。なぜなら、伝える場所があり、コミュニケーションをとる場面が設定されているという必然性があることで、自身の思いをいかに他者に伝えるかという他者意識をもつことが自分自身の課題となったからだと考えている。

本実践をとおして、外国語を使う必然性がある活動とコミュニケーションをとる必然性がある活動を連携させること、また他教科や他領域との関連を行い伝えたい内容を明確にすることで子どもたちが積極的に外国語を活用したいと考えることに効果的に作用するという見解が得られたと考えている。

今後も、対象者を明確にし、より実際の場をイメージできるような単元の設定や教具の工夫を行い研究と仮説を検証するために実践を継続したいと考えている。

一方で、毎回そのような単元の設定は困難であることも考えられるので、子どもたちが将来、外国語表現を使うことが必然的なことであると考えられるような場面の設定を行う実践も構想していきたいと考えている。

参考文献

- ・仲川浩世(2015)「授業観察記録を基礎として 小学校における外国語活動展開事例の検討」,研究論集